

谷崎潤一郎『痴人の愛』考察

——有島武郎軽井沢心中事件の影響について——

磯田知子

はじめに

『痴人の愛』は、大正十三年に『大阪朝日新聞』紙上に連載を開始した。その十三章、大正十三年五月三十日掲載分において、次の記述が登場する。

そのついで、鼻の先に、一冊の本がページを開いたまゝ、落ちておきました。それは彼女の批評に依れば「今の文壇で一番偉い作家だ」と云ふ有島武郎の、「カインの末裔」と云ふ小説でした。

連載時において、前年の六月九日、有島武郎は軽井沢にて『婦人公論』の記者波多野秋子と心中し、七月八日新聞紙上にて遺体発見の報道があつた。この場面の執筆時からほぼ一年前になる頃で、このような時期に有島武郎の名前が登場すると、読者として

は——少なくとも文壇においては、心中事件に思いをはせざるを得ない頃合いである。執筆現在時点の「今年」が大正十三年とすると、その時のナオミの年齢二十三才から遡ればこの箇所は大正八年の時点となる。有島武郎が最も活動的だった時期で、『カインの末裔』は大正六年七月『新小説』に発表され、大正七年に新潮社より書籍刊行がされた。時間軸としては矛盾がない。ただ、農民を主人公とし、その葛藤を描いた作品を、都会育ちで思想性の欠片も見えないナオミが「一番偉い作家」と言うのは奇異な感じさえする場面である。

本稿では、あえて一周忌のこの時期に有島武郎を書き込む谷崎の意図を重視し、谷崎が示した一つの指標として考察を行いたい。この後に続く昭和初年代の豊潤な作品群の始めとして位置付けられるものとし、この事件がどのように作品に影響し、どのように投影されたのか。その関連を探り、昭和初年代作品を考察する足掛かりとしたい。

一 「ナオミ」のモデル

『痴人の愛』のモデルについて谷崎は座談会⁴で「一人の特定のモデルはないけれども、みんななにかからとっている」として、モデルが一人であることを否定している。

従来の指摘では義妹せい子が「モデルと」いわれている⁵とされており、平山城児も「実説『痴人の愛』と題し、当時せい子が起こした事件を紹介していて、それらを参考にしたことはいかがいしれる。西莊保⁷もまた、せい子を「ナオミのモデル」としている。しかし、それぞれ彼女を引用することが創作上作品にどのような機能しているのかは不明瞭である。しかも、西が指摘する通り、「せい子をモデルとした小説は大正後期に数多」く、その中で『痴人の愛』は「正式に妻になっっている」。確かにせい子を参考にし、モデルの一人として否定するものでもないが、それ以前の作と差異が生じているのも確かである。

また、作中ナオミが西洋人くさい顔立ちを持つと設定されている。しかしそれは、あえて現代の俗語を使って表現するなら「米国エンタメ・オタク」⁸が、生ける「フィギュア」⁹を手に入れ、『シンデレラ』『小公子』などメアリー・ピクフォードの出演作¹⁰にちなんだ映画の館ならぬ「お伽噺の家」で彼女と暮らし、かつ破綻しながらも再び西洋「コスプレ」をした女に魅せられて唯一無二と悟り、よりを戻すという、つまり譲治の嗜好と作品展開が要

求した設定ではあるまいか。ゆえにモデルが主要因であるというのは少し疑問が残る。

したがって義妹せい子一人に縛られず、「みんななにかからとっている」とする谷崎の言にしたがい、本稿ではモデルの一人として、「はじめに」であげた有島武郎の心中相手「波多野秋子」を検証したい。

二 有島武郎軽井沢心中

有島武郎の心中相手波多野秋子は『婦人公論』における谷崎の担当記者であり、大正十二年の遺体発見直後の特集号で谷崎は「名妓¹¹のもつ眼」として波多野秋子の印象を寄せている。山田耕筈が心中発覚すぐに秋子のことを「凄みの勝た強くそして暗い影を持つ瞳」「赤黒いどこか冷たい唇」「魔的なコケツトリー」などとコメントするのに対し、谷崎は「名妓のもつ眼」で、

いつ会つても心易く、思ふことをテキパキ語ると云ふ態度だつた。私の家ではみんなが「美しくていや味の無い、感じのいい人」と云ふ定評だつた。

などと山田耕筈に反論するのごとくであった。

心中にいたったいきさつは、当時の雑誌¹²に詳しい。有島武郎は早く妻を亡くし独身であったが波多野秋子は有夫の人であった。

有島は美貌にはなびかなかつたが、観劇で席が前後になつたときに秋子が涙をこらえきれず立ち上がり、有島の視界を遮つたことをわびた手紙がきっかけで友人関係になり、急速に二人の仲は発展した。秋子の夫春房に二人の仲が発覚、春房は秋子の金銭取引を要求した。しかし、有島が「自分の生命がけて愛して居る女を僕は金に換算する屈辱を忍び得ない」と断り、春房が姦通の罪で警視庁に同行しろというのに有島が応じたため話し合ひは瓦解、心中にいたつたものである。当時の新聞で、秋子の友人石本静枝の夫恵吉男によると「愛の程度は有島氏の方が非常に強く」また有島の友人足助素一によると「女の方から死の相談は出た」という情死行であつた。特に有島が「歓喜して死を迎える」と遺書に書き、新聞でも紹介されたため「恋愛の極致」として選ばれた死との解釈も出た。

この事件は、当時の文壇では著しい関心をひいた。心中の同年十一月、廣津和郎は、

有島武郎氏の例の心中問題については、(中略)大概に於いては、頗る評判が好かつたやうだつた。年の若い男や女の夢見心地の讚美は一寸困つたものだが、さうでない、相当の知識のある連中でも、「死ぬと云ふ事はよくよくの事だ。その死を敢て決行したのだから、生きて居る連中の考へるやうなものではない。もつと尊敬すべきものだ」と云つたやうなところに、結局落ちて行つたやうだつた。

ここで廣津は非難されるべき不倫の情死行が讚美されている奇異を指摘すると共に、「僕は武郎氏の『心中』そのものからは別段何の感動も受けなかつた。」とも述べる。「僕は」受けなかつた」ということは、受けた人もいるということだ。たとえば島崎藤村が「あれほど私達の心を打つといふこともなかつたらうと思う」と述べ、また、生田敏郎「双方とも知つて居る人だつたので、感動を受ける量もなかなか少なくなかつた。」とか、評判のよさとして伊藤朝子²⁰「氏のために満腔の喜びを捧げてゐる」、あるいは新しき村・鈴木安太郎「愛の行者としての武郎さんを讚美してやまぬ」などといった評がある。

讚美はおおよそ両者を個人的に知る人や、有島の作品を読みつくしている人の言である。非道德であるが故にオフレコで語られたものもあると推測され、それは知る由もないが、つまり谷崎自身も両者を知る人に該当する。そして彼が二人のこの行為に、何を思い、考えたかである。

三 女性崇拜の精神

文学者たちに称讚と感動をもたらしした有島心中事件である。谷崎自身も何らかの感銘を受けたであろうが、当事者を知らぬ人から批判があつたのも事実である。特に秋子のことを「異常な女」、二重恋愛を女がしたこと「非常に変態的」との指摘もあつた。

そこで、既に拙稿²³で谷崎の恋愛文学における、あるべき女性像ならびに女性観については述べたが、今一度確認したい。

谷崎は昭和六年『恋愛及び色情』²⁴で、次のように述べている。

敦兼（引用者注『古今著聞集』の登場人物。邪見にされた妻に箒箒を奏で、歌いかけることで心離れた妻の心を取り戻した）のやうな男を意気地がないと云つてしまえばそれ迄だけれども、これを云ひ換へれば女性崇拜の精神である。女を自分以下に見下して愛撫するのではなく、自分以上に仰ぎ視てその前に跪く心である。西洋の男子はしばしば自分の恋人に聖母マリアの姿を夢み、「永遠女性」の俤を思ひ起すと云ふが由来東洋には此の思想がない。

平安時代を除く、日本の恋愛文学の調子の低さの原因は、西洋と比較すれば「男と女の位置」関係にあり、結局「女性崇拜の精神」がないからだと述べる。平安時代から隔たった江戸時代にも恋愛ものは登場し、大きな感動を生む作品はあるものの、浄瑠璃などにある小春や梅川などの心中もの作品の女性たちは、その心中は金に行き詰まっていたものであって、彼女らは「要するに男の膝に泣き崩れる女でしかないのである」。

対し、明治の尾崎紅葉と夏目漱石の描く作品を比較し、この二作品に登場する女性には大きな隔たりがあるが、谷崎はうち漱石が「有数の英文学者でありながら決してハイカラの方ではなく、

寧ろ東洋の文人型の作家であるが」としながらも、次のように述べている。

文学は時代の反映であると同時に、時代に一步先んじて、その意志の方向を示す場合もある。「三四郎」や「虞美人草」の女主人公は、柔和で奥床しいことを理想とした旧日本の女性の子孫でなく、何んとなく西洋の小説中の人物のような気がするが、あの当時さう云ふ女が多く實際にゐた訳ではないとしても、社会は早晩所謂「自覚ある女」の出現を望み、且夢みてゐた。私と同じ時代に生れ、私と同じく文学に志したあの頃の青年は、多かれ少かれ皆此の夢を抱いてゐたのであらうと思ふ。

大正期にはいわゆる「新しい女」たちが登場し、谷崎が関わった女性記者たちや、この文章が書かれた昭和初期に関西で出会った女たちは、一世代下とは言え「自覚ある女」たちの出現を感じさせるものであったらう。

つまり谷崎のいうところ、平安時代には存在した恋愛文学の調子の高さが失われたのは、女性崇拜の精神が失われ、女性が男性より下位の存在となつてしまつたためである。そして西洋の恋愛文学と比較し、「姦通を描き、失恋自殺を描き、道徳的には可なりいかゞわしい情景を扱つてあつても、その調子の高いことは到底わが元禄文学の比肩し得るところではない」。

故にここで谷崎が述べるように、大正末年現在、彼が日常で上位の女性を描き、かつ崇拜する恋愛小説を発表したところで、世間にリアルなものとして受け入れられ、称讃せられるのかという障壁にいたる。結局これは、時代の変化を待つか、あるいは谷崎が「時代に一步先んじて、その意志の方向を示す」必要があったのではないか。

しかしこの大正年代にあって、軽井沢心中は「女の方から死の相談は出」、それに男の有島が応える形でなされたのである。『婦人公論』記者として働き、英語を駆使して外国人と交際する「新しい女」「自覚ある女」ともいえる波多野秋子に、強いが廣武郎の献身によって成立したこの心中事件は、廣津和郎が否定しようとも、称讃されたのである。

いるはずのない理想の男女がそこにいて、文学者を中心に感動を呼ぶ事件を起こした。作家として芸術家として谷崎は、何の感興も起こらず、無視しえたであろうか。

四 「名妓のもつ眼」

「調子の高い」日本の恋愛文学が生まれづらい現実にあつて、感動を生み称讃された恋愛事件が発生したなら、その要素を作品に投入すれば同じような反響に行きつくとも考えられる。波多野秋子は谷崎にとって既知の女性であり、三十年以上経った座談会²⁵で記者初期の彼女を「瀧田（橋陰）君となにかあると思つてい

た」「波多野秋子はきれいでした」と語っている。有夫の人名がらその後も「三人（引用者注 永井荷風、大山郁夫、有島武郎）好きな人があつた」と噂を立てられるような、交友関係も広く、派手で個性的な女性であつた。

京阪電気鉄道重役の林謙吉郎の庶子で、母は新橋の芸者であつた。嶋中雄作は「下町育ち」と証言している。十三才上の波多野春房が経営する英語塾に秋子を通つていた間に知り合い、春房には妻がいたにもかかわらず十九才で結婚、青山女学院を卒業後、『婦人公論』に二十四才で記者として入つた。秋子が春房の元で大学に進学し、記者になつて職業婦人として働くことを許したということは、春房もまた秋子を「新しい女」あるいは「自覚ある女」として育てようという意志があつたのかもしれない。夫春房は、英語塾のの実業家に転身している。そして、谷崎が知るはその記者としての秋子である。

秋子が記者として訪問した際に、谷崎自身が「横浜²⁷の友人があつて、（引用者注 時々、谷崎に原稿の相談や催促がたがた訪ねてくる、その）ついでがあるのだ」と紹介しているが、外国人と交際できるほどに達者な英会話力を身に着けていた²⁸。師は留学経験もある秋子の夫春房である。

つまり谷崎が出会つた時の秋子は、美人で、実業家である夫以外の男性と噂があつて、外国人と交際し、英語を流暢に話す『痴人の愛』の結末のナオミを彷彿とさせる秋子である。夫春房が「三人好きな人がいる」と噂を立てられる妻をどう思つていたか

は定かではないが、だからと言って秋子は記者を辞めようとした気配もない。

しかし芸者の娘とはいえ林謙吉郎の娘で、「品格が高い」彼女と、浅草千束町の銘酒店で生まれたナオミとに隔たりがあるのは確かである。そのことは後に述べるとして、秋子とナオミの関連について確認したい。

『痴人の愛』には、ナオミと譲治の正確な年の差が書かれている。ナオミとの十三才という年齢差は決して近いとは言いがたい。先にも述べたが、秋子と夫春房の年の差も十三才である。春房には妻がいたとはいえ離婚し、秋子とは正式に婚姻関係を結んだ、これも譲治ナオミの関係と同じである。

さらに身体的特徴として、「丈のストラツとした」外国人に比較される身体も共通している。作中、水泳の達人ケラーマンを主役にした「水神の娘」という映画の話が登場し(四)その映画の場面の真似をさせる。これはナオミの胸が短く足が長くて美しいためであるが、秋子の身体も次のように紹介されるところがある。

ガリイ・カルシイ(引用者注 秋子が好きだったソプラノ歌手)は小づくりの人で、波多野さんほどの美人ではないさうだが、全身を横から写した立姿に、大変よく波多野さんに似たのがある。(上司小剣「ガリイ・カルシイの思ひ出」)

また、秋子の目の持つ力の強さは誰もが語るところであるが、

例えば本文でナオミは、

その眼は女のものとは思はれないほど、炯々として強く凄じく、おまけに一種底の知れない深い魅力を湛へてゐるので、グツと一息に睨められると、折々ぞつとするやうなことがあつたからです(六)

と記述され、対し、波多野秋子は、

あの眼はたまりません。あの眼でちつと見つめられたら、有島氏でなくとも誰でも死ぬ気になりませう。(中略)あの眼の奥に横はる不可思議な情熱の火です。(永谷竹紫「あの眼!!あの眼の光!!」)

と証言されている。

また、性格的な特徴として、ナオミの「あたし男よ」(十三)というやうな態度も秋子の「中性的と感じさせた」場合によって「男勝り」と評されるところに通じ、言い方も「つんけんしていて女としての優しみに欠け」(十)も秋子の「もつと優しいところがあつてもい、」というところに通じる。

同じ五章でナオミの衣裳道楽のエピソードがあり、珍しい裂地を探しに行く場面が登場するが、山川菊栄の秋子の証言に

時には現代の貴婦人、時には下町娘、時には芸妓上りの囲の者、時には江戸時代の水茶屋の茶汲女といふいでたちで現れた。殊に衣装は金紗とかお召とかいふのであらうが、いつも私などは名も知らず、見たこともない切れで製造した恐ろしく美しいものづくめであった。

とある。続く山川菊栄の文章では秋子が「自分は美人だといふ意識が——多くの男性、殊には女にのろい文士達を片端から惱殺し得るという自信が」あり、ナオミの「天下の美人は私です」(十一)にも通ずるところがある。

また、結婚当初のナオミの言葉「譲治さん、きつとあたしを捨てないでね」(五)は、秋子が春房に対し「愛の移る時私は死にます」と文言こそ違え、内容は同じである。

さらに友人石本静枝宛書簡によると、

どうかして波多野のい、「妻」になりたい。そのみ願つて居ります。しかし波多野自身は私がい、妻にならないでも不足を言ひません。それどころか、今のぐうたらな、あまつたれの、だゞつこの私の方が可愛い、のかも知れないのです。

『痴人の愛』の中に描きこまれる「だらしな(五)」「ぐうたら」「甘つたれた(八)」「あまつたれ」「だだ、ツ児(三)」「だゞつこ」の言葉がここにも並んでいる。

加えて、夫婦の恋愛事情として同じ石本静枝宛書簡では次のようにある。

今から丁度十二年程前私は波多野に参りました。始めて生れた赤子のやうに私を愛し教育して呉れました。十二年の永い間只の一度も私から愛が離れませんでした。只々此の世の中に私一人の為に生きてゐる彼です。私もその通りで、彼の温いふところにかたく抱かれ、溶けるような愛の生活をつけ、子供の様な妹の様な心で今日まで参りました。波多野に生れた私と云ふ赤んぼは年頃になつて恋を知りました。真剣な恋を致しました。その相手が武郎だったので。

譲治とナオミとの関係でいけば、「パパさん」「ベビちゃん」の関係である。しかしそれゆえに、秋子が夫に対し男女の恋愛感情がかつて、あるいはこの時、存在したのかという甚だ疑問で、恋というよりは、保護者に接するような感覚で夫に接していた感がある。

また、ナオミは音楽学校に通つて歌を歌うが、秋子も声楽をさき、音楽をたしなむ。谷崎が「あなたはピアノは？」と尋ねると、秋子は「ピアノはやりませんが、マンドリンなら少しやります」と答えるが、作中に登場し、ナオミと関係を持つ学生「浜田や熊谷」の所属するクラブもマンドリン部である。選択肢としては珍しい。

以上のように、ナオミとの共通点は多くある。タイトルから推せば「痴人」に至ることが結末であるのだから、結末を想定しながら作品は書き始められたはずである。その結末部分の「ナオミ」と、谷崎と記者として交流していたころの波多野秋子が相当似通っているのなら、むしろ彼女をイメージしてナオミは形作られていったのではないか。のみならず、そもそもカフェに通う十三才も年上の「君子」と呼ばれる男性が、見合いでもなくカフェの女給の少女を「ナンパ」をし共同生活を始め、やがて妻にするなどということはあまりリアルではなく、親が無頓着だったということを理由にはしているが、難しい状況を無理に通した感がないではない。妻の妹でもなく、妾でもなく、出合いの発想の端緒がどこにあったかと考えるべきである。秋子は春房の経営する英語塾に通って妻にされた。教室なりカフェなり比較的公的な場にいる「彼女」を、年上の中流層の「彼」が発見したという意味では、手順は重なる。

作品の上では二十三才で幕を閉じる『痴人の愛』ではあるが、秋子は二十四才で記者となり谷崎と出会う。噂の上では「自由奔放」で個性的な波多野秋子が、後に恋をした男に献身させた、のであるなら、想像の助けとして引用した可能性はある。

五 「意志の方向を示す」ために

先にあげた『恋愛及び色情』では、「文学は時代の反映である

と同時に、時代に一步先んじて、その意志の方向を示す場合もある。」とある。『痴人の愛』の作品冒頭では、次のように河合譲治が述べて物語は始まる。

私はこれから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私たち夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざつくばらんに、有りのまゝの事実を書いてみようと思ひます。それは私自身に取つて忘れがたない貴い記録であると同時に、恐らくは読者諸君に取つても、きつと何かの参考資料となるに違ひない。(中略)今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦関係も、追ひ／＼諸方に生じるだらうと思はれますから。

この場合、この作品は「時代の反映」ではなく実践する時の「参考資料」である。かつ「追ひ／＼諸方に生じる」とあり、谷崎の『恋愛及び色情』の言のつとれば、未来に向かって「諸方に生じさせたい」ととるべきである。

『痴人の愛』という作品は、本来なら姦通罪で訴えられるべき状態にありながら、結局譲治はそれを見過ごしながらナオミとの結婚⁽⁹⁾関係を続けることになる。ナオミは世間でいえば「淫売」ととられる女であるが、男女関係を入れ替えればこのような男性はいくらでもいる。しかし先にあげた波多野秋子批判にもあつたが、そのような行爲を行えば「異常な女」「変態的」と言われて

しまう。あまりに公平ではなく、要するに女性を下位におく上に、女性はこうあるべきと決めつける風潮の中にあった。しかし女性上位、あるいは同位は谷崎言うところの「調子の高い」恋愛文学に必要な要素の一つであり、それが社会に浸透せねば成立も不可能という考えである。新聞小説でスタートしたことも考えあわせれば、社会に女性上位あるいは同位を広く行き渡らせたい思想があったこの物語は作られたと考えることもできる。結果として当時まだ存在^④の薄かった「モダンガール」が、大流行にのし上がったのも、この作品が一役かっている可能性さえある。

小説にしろ、映画にしろ、ひとたび話題になれば社会への影響力は強く、『痴人の愛』の中で直接欧米を知らぬ譲治とナオミがその名のごとく「お伽噺の家」で欧米の文化を取り入れながら生活しようとしたように、あるいは譲治がナオミに映画の女優たちを重ねてしまうように、『痴人の愛』もまた世間でそうなることをねらって書かれたのではあるまいか。

昭和六年『中央公論』発表の『吉野葛』などは作品の登場人物が物語に影響を受け、現実にも物語の世界のものを顕現させる享受者の姿を描いているし、物語ではないが有島心中事件で彼らに倣って心中者が出ている。人の心を強く動かせば、それは受け手の中で現実と同化し、あるいは現実に顕現させるといふことは特に珍しいことでもない。

しかしあくまでも谷崎自身無理な欧米化は期待しておらず、『痴人の愛』の中ではないかにも日本人顔の井上菊子が似合わない

洋装や化粧をすることを批判する場面さえ登場する。「せつかくの器量をダイナシ」「そのまゝにして置けばいゝのに」(十)と。それは別の意味で「意志の方向」を示したのやもしれず他にも前掲『恋愛及び色情』で、

私は嘗て、小説『蓼喰ふ虫』の中で、主人公の感想に託して文学座の人形芝居のことを下のやうに記した。

とあり、また、同じ『蓼喰ふ虫』では女性が電車の中でコンパクトを使うことに苦言を呈しているが、谷崎は時々、作品の筋に矛盾を生じさせず人物造形の中で許される範囲で、時代や社会に向かって意見、あるいは感想を述べることもあるのだ。作品の持つ力を利用し、社会を変えたいというわけである。

しかし、「調子の高い」恋愛文学を成立させる「女性上位」「自覚ある女」を受け入れられる社会にしたいのなら、青山女学院を卒業した波多野秋子のような才女たちだけでは結局は一部のことに終わってしまう。そこで、「ナオミ」である。

彼女はそもそも浅草千束町の俗にいう私娼窟に生まれた。誤解を恐れずに書くなら、彼女もまた『カインの末裔』で書かれる農夫と同じく低所得家庭出身の相対的な社会的弱者である。ガサツさや生まれを譲治に内心でなじられながらも、チャンスと自分の魅力を生かし、やがては中・上流へと駆け上がっていく。学もなく、身分もない無産階級にまなざしを向けた有島は、ナオミにと

つては確かに「一番偉い作家」に違いない。大正デモクラシーに
わく日本の都会で、中流の「サラリー・マン」を語り手におき、
低階層の女を仰ぎ見ること、^⑤「自覚ある女」、女性上位を、あら
ゆる階層で、社会全体が受け入れる素地の生成を期待したのでは
ないだろうか。

おわりに

有島武郎は欧米に留学し、廃教したとはいえ元クリスチャンで
ある。有島は谷崎の理想に通じる条件を備えた人物であるが、む
しろ谷崎が有島に学んだとも考えられる。彼が心中した原因は思
想や作品の枯渇、有夫の人との不倫に追い詰められたなどと色々
挙げられるが、男の方の想いが強く、女が死を望んだという形で
成立したというのとは紛れもない事実である。

この事件は後の谷崎の作品に様々な影を落とし、例えば、三人
心中を描いた昭和三年『改造』発表の『正』にはその影が色濃
い。

前掲の石本静枝宛書簡にある秋子の文章には、

世間を知るにつれて私の心に亡き父の豪放なしかしかなりに
淫蕩的な分子が芽を出しはじめたやうでした。美しい男性的
な異性の気持を弄んでやる快感に身うちがうづくやうな気持
の時もありました。(中略) 時には豊満な女の肉体に引つけ

られるような変態的気持の時もあります。

『正』につながる三人心中に関しては、秋子の夫、波多野春房
が「私が自殺する決意を知つて二人が先に 有島氏が私の友人な
ら三人心中になつた筈」と新聞に述べている。^⑥『正』自体は有島
心中のような人々から称讃を受けるそれとはおよびもつかない。
作品のもたらす影響を考えれば「昭和の曾根崎心中」のごとく模
倣心中を生む恐れがあり、それは避けるであろうが、他にも三角
関係を描いた作品に、昭和六年『新青年』発表『武州公秘話』、
昭和七年『改造』発表の『蘆刈』がある。そして昭和八年『中央
公論』発表の『春琴抄』の春琴に、気位の高さが設定されたの
も、母方の祖父を「じいや」と呼んで決して家にあげなかった秋
子の性格にも通ずるところがある。この時代にあつて女性を上位
に置くならば、身分的に上に置るか性格上の工夫をするかである
が、昭和初年代の谷崎作品は多くこれらの形をとっている。

ただ闇雲に、どんな女でも拝跪するのではなく、できるだけ中
流層以上に女を設定する傾向に転じたのが、どこであつたか。関
西中流層の子女と交際を始めたその影響も大きいだろうが、春琴
の冷酷なまでの気位の高さは三番目の妻松子にもない。また、目
をつく献身とそれによつて共に盲目となり二人で彼岸に飛躍する^⑦
『春琴抄』は、心中をせずとも到達した至高の愛の形ともとれ、
『正』、三人心中を画策する『蘆刈』、死して二人が結ばれる『妹
背山婦女庭訓』の対岸成就場面の現地訪問が描きこまれた『吉野

葛』と考えあわせても、何らかの指標とすべき心中事件があったはずである。

物語と現実とは、常に行き来をしながら人々に影響を与えて来た。有島軽井沢心中は物語ではないが、人々に強い衝撃を与えたこの事件は、同時代を生き、二人と既知であった谷崎にも大きな影響をもたらしたはずである。印象を寄稿し、座談会で二度語り、「有島武郎の、『カインの末裔』」を書き込み、女の特徴を多く引用した。谷崎自身も深い感銘を受け、創作の起爆剤となつて、彼を動かした事件であつたとしても不思議ではない。

注

- (1) 『東京日日新聞』『東京朝日新聞』大正十二年七月八日朝刊
- (2) 浅野洋は「反・山の手の物語——『痴人の愛』の戦略——」（『昭和文学論考 マチとムラと』八木書店 平成二年四月）で、作中に夏目漱石の「草枕」と共に挙げられていることを指摘、「作者の緻密な計算に基づく戦略的な表象」である作品の中で「戦略」を解く重要な鍵のひとつ）としながらも有島の名は「文学の内実とは無縁の、ゴシップ的な世評の高さを諷する揶揄」として登場させたことあるが、たつた二人書き込まれた日本人作家のうち、漱石と並べられた彼が「鍵」でない根拠が不明である。
- (3) 千葉俊二は共同討議「谷崎の作品を読み直す」（『国文

学』昭和六十年八月）で「痴人の愛」が「昭和期の谷崎の出発点であるのか」「大正期谷崎文学の集大成」かと述べていて、論者によってそれぞれの立場は違うが、ここでは現仮定として前者をとることとする。

- (4) 「文豪秋の夜話 昔の女今の女」（『婦人公論』昭和三十三年十一月）
- (5) 千葉俊二「痴人の愛」（鑑賞日本現代文学 8 谷崎潤一郎）角川書店 昭和五十七年）
- (6) 福田清人編 平山城児著「谷崎潤一郎」（清水書院 昭和四十一年十月）六十八頁。ただしここでは不良少年との事件であり、慶応大学の学生との差異は考察されていない。
- (7) 西庄保「谷崎潤一郎『痴人の愛』と新しい女」（『日本近代文学論集』35 平成二十一年）
- (8) メリー・ピックフォード公式ホームページ「メリーピックフォードオンライン研究室」(<https://marypickford.org>)「ピックフォード財団 令和五年三月十五日閲覧分」の「出演作品一覧」より。
- (9) 「お伽晰の家」を中心とする作中人物のフィクション受容に関してには紙幅に限りがあり、本論から逸脱するため、別稿に譲りたい。
- (10) 斎藤淳「『痴人の愛』——デミル映画の痕跡——」（『立教大学日本文学』第六十五号 平成三年三月）に、作品未

尾の和解について、ナオミが「ポーラ・ネグリの映画の登場人物化」したという指摘・報告がある。

- (11) 『婦人公論』大正十二年八月号掲載。全集二十三卷
- (12) ここでは注(1)の『東京日日新聞』「直観力に鋭い魔的の美人」を引用した。
- (13) 交際きっかけのエピソードは石本静枝「秋子さんの想ひ出」(『婦人公論』大正十二年八月)、波多野春房とのエピソードは足助素二「淋しい事実」(『泉』大正十二年八月)による。
- (14) 「二人が最後まで躓えない牆」(『読売新聞』大正十二年七月十日朝刊)
- (15) 「有島氏が死を急いだには深い事情がある」(『読売新聞』大正十二年七月十日朝刊)
- (16) 厨川白村「有島君の生涯は五番物の戯曲」(『サンデー毎日』大正十二年七月二十二日)
- (17) 廣津和郎「有島武郎と武者小路実篤の恋愛事情」(『文藝春秋』大正十二年十一月)
- (18) 島崎藤村「有島武郎君のこと」(『早稲田文学』大正十三年三月)
- (19) 生田敏郎「唯一度の印象」(『婦人公論』大正十二年八月)
- (20) 伊藤朝子「有島武郎氏を憶ふ」(『愛聖』大正十二年八月)
- (21) 鈴木安太郎「愛の行者として」(『サンデー毎日』大正十二年七月二十九日)
- (22) 前掲注(16)に同じ。
- (23) 拙稿「谷崎潤一郎『春琴抄』考察「高尚なる恋愛文学」への挑戦」(『武庫川国文』第四十二号 平成五年十二月)
- (24) 「恋愛及び色情」(『婦人公論』昭和六年四月―六月)全集二十巻
- (25) 前掲注(4)の座談会「文豪秋の夜話 昔の女今の女」に同じ。なお「新春座談会」(『中央公論』昭和十一年二月)でも話題に上がっている。
- (26) 波多野秋子の上司で当時は『婦人公論』主幹。「波多野秋子氏の靈に捧げて一切を明かにす」(『婦人公論』大正十二年八月)での証言である。しかし注(13)「石本静枝の文章に掲載された秋子の手紙の中では乳母がいたとも書かれている。」
- (27) 前掲注(11)の「名妓のもつ眼」(『婦人公論』大正十二年八月)
- (28) 鶴見祐輔「珍しい日本婦人」(『婦人公論』大正十二年八月)
- (29) 村松梢風「私の知れる秋子さん」(『婦人公論』大正十二年八月)
- (30) 注(29)に同じ。
- (31) 『婦人公論』(大正十二年八月)

(32) 注(31)の雑誌に掲載分。同じ証言が多いので代表的なもののみ記した。

(33) 生田長江「あり得る事及びありさうな事」(『婦人公論』大正十二年八月)

(34) 森下岩太郎「思ひつくま、」(『婦人公論』大正十二年八月)

(35) 宇野浩二「感じの堅い人」(『婦人公論』大正十二年八月)

(36) 山川菊栄「有閑階級の運命を暗示する二人」(『解放』大正十二年八月)

(37) 「愛の移る時私は死にます」(『東京日日新聞』大正十二年七月九日)

(38) 前掲注(13)の石本静枝のもの。

(39) 大橋房子と有島武郎の関係を嶋中雄作が注(26)の中で「ババアとベビイの関係」というたとえ方をしている。

(40) こうした結婚関係については、有島武郎が波多野秋子と交際中に「ワルト・ホキツトマン」(『ホイットマン詩集第二輯』叢文閣 大正十二年二月)において、有夫の人と関係が生じた時のホイットマンの解説にあたり、「男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される」自由結婚を希求することを有島は述べているが、結婚に関する考察は紙幅の都合上、別の稿に譲りたい。

(41) 前掲注(7)の論文での西の指摘を参考にした。

(42) 拙稿「吉野葛」考——実感へのパターン」(『阪神近代文学研究』創刊号 平成七年五月)において指摘した。

(43) 千葉亀雄「有島氏の迷惑」(『女性改造』大正十二年八月)に「情死者や自殺者が多くなった」とあり、「有島氏的情死を慕って死ぬ」遺書があったことが紹介されている。

(44) 『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』昭和三年〜四年連載

(45) 谷崎「青塚氏の話」(『改造』大正十五年八月)の「由良子型」も有島「独断者の会話」(『泉』大正十二年六月)の「永遠の女性」に重なるが今後明らかにすべき課題である。

(46) 「春房氏の告白」(『読売新聞』大正十二年七月十日)

(47) 前掲注(26)で嶋中雄作は、秋子自身もナオミと同じく自身の母方の出自を「隠さう〜」としていたと証言している。

(48) 前掲注(23)の拙稿で述べた。

*本文の引用については『谷崎潤一郎全集』(中央公論社 昭和五十七年)を、新聞雑誌については原本を、また谷崎「名妓のもつ眼」についても『婦人公論』の記事を使用した。

*本論は、平成八年六月、日本近代文学会関西支部春季大会(於 相愛女子短期大学)において行った「『痴人の愛』の奈緒美——『私小説定義とモデル説』疑義」の発表内容を利用

し、大幅に改変したものである。

(いそだ・ともこ 帝塚山高等学校)